

「気づき・感じ・伝え合うことを大切にした安全教育の日常化」

令和6年度 高知県学校安全総合支援事業

土佐市教育委員会 拠点校 土佐市立蓮池小学校

1 事業の目標

(1) モデル地域の現状及び安全上の課題

土佐市は、高知県の中央部に位置し、東は仁淀川を隔てて高知市といの町、北は日高村と佐川町、南西は須崎市と海に隣接しており、洪水や土砂災害、台風等の自然災害が発生しやすい立地条件にある。過去に発生した南海地震の状況から被害の広域性や地域の孤立等の災害特性等も踏まえた対策を進めていく必要がある。

蓮池小学校は、令和5年度に引き続き本事業の拠点校である。市内で2番目に大きな規模の小学校であり、南海トラフ地震の津波浸水地域には想定されていないが、災害時には、地域住民の避難所に指定される。また、交通量の多い国道56号や県道287号家俊岩戸真幸線を徒歩で横断して登下校する児童も多く、通学路の危険箇所も多い。さらに校区が広いため、道幅の狭い箇所や見通しの悪い通学路もある。こうした学校を取り巻く様々な学校安全上の課題について、学校はもとより地域の関心も高く、地域の見守りボランティアの活動なども推進しており、蓮池小学校を拠点とした安全教育の取組内容を普及し、土佐市全体の安全教育の推進を図る。

(2) モデル地域の事業目標

- 日常生活全般における安全確保のために必要な事項を実践的に理解し、生涯を通じて安全な生活の基礎を培うとともに、安心・安全な社会づくりに貢献できる資質や能力を養うことを目指し、拠点校において「生活安全・交通安全・災害安全」の3領域において取組を実践する。
- 拠点校の取組内容や成果を市内小中学校で共有し、各校に学校安全担当教員を位置付け、安全教育の取組を推進する。
- 学校・家庭・地域が連携を図りながら、地域全体で安全教育に取り組む体制の構築を図る。

2 モデル地域の取組の概要

(1) 安全教育の充実に関する取組

ア 安全教育の充実に関する取組

- ・拠点校である蓮池小学校の実践的な取組を、実践委員会を通じて連携校である宇佐小学校、高岡第一小学校、高岡中学校の学校安全担当教員が自校の安全教育の質の向上に役立てる。
- ・実践委員会での報告や、研究発表会での実践発表（土佐市内小中学校へ案内）等で市内全体に普及を図る。
- ・学校安全担当教員を中心として、管理職とともに学校安全教育の計画、実施、検証を行い、危機管理マニュアルや学校安全計画の見直し等の改善・充実を図る。
- ・学校安全教員の資質向上を図るため、拠点校での公開授業を市内の小中学校に案内し、学校安全担当教員が参加し、外部有識者による講話を受け、各校の学校安全に係る改善や対策に活かしていく。

イ 安全教育の取組を評価する・検証するための方法について

- ・各学校において危機管理マニュアルの見直しや内容の周知などを行い、日頃の安全教育・安全管理や危機発生時における各教職員の役割について、共通理解を図っている学校の割合
 - ・学校安全を推進するための学校安全担当教員（管理職以外）を校務分掌に位置付けている学校の割合
 - ・学校安全に関する校内会議や研修等を実施している学校の割合
 - ・拠点校の取組について、自校の教職員に校内会議や研修等で共有した学校の割合
- 上記の評価指標において、評価・検証を行う。

（２）組織的取組による安全管理の充実に係る取組

- ・学校安全担当教員を中心として、管理職とともに学校安全教育の計画、実施、検証を行い、危機管理マニュアルや学校安全計画の見直し等の改善・充実に図る。
- ・学校安全担当教員の資質向上を図るため、拠点校の公開授業に参加し、外部有識者による講話を受け、各校の学校安全に係る改善や対策に活かす。
- ・様々な場面を想定した避難訓練の実施（年間３回以上）
- ・拠点校による公開授業・研究発表会の実施（市内小中学校へ案内）

（３）学校安全推進体制の構築及び学校安全担当教員の資質向上に係る取組

- ・学校安全実践委員会で連携校と情報を共有し、自校の安全教育の取組の充実に図る。
- ・拠点校の取組（公開授業、防災キャンプ、研究発表会など）の中で、地域や各専門機関等、多くの講師を招聘し専門的な立場から助言を受けたことで、災害に対する認識を深め、拠点校だけでなく、参加した市内の学校安全担当教員の意識向上へつなげる。

3 拠点校の取組

（１）拠点校の目標

【学校目標】

学ぶ意欲と豊かな心を身に付けた、たくましい子どもの育成

【研究主題】

自ら学ぶ力を身に付け、生き抜く力をはぐくむ

～「気づき・感じ・伝え合う」ことを大切にした安全教育の日常化～

- ①安全な行動を自ら考え、実践できる児童の育成を目指す。
- ②安全教育の目標設定・評価検証のサイクルの確立を目指す。
- ③児童が安心・安全に過ごすことができる施設・設備の管理の徹底を目指す。

（２）具体的な取組

<1年生>

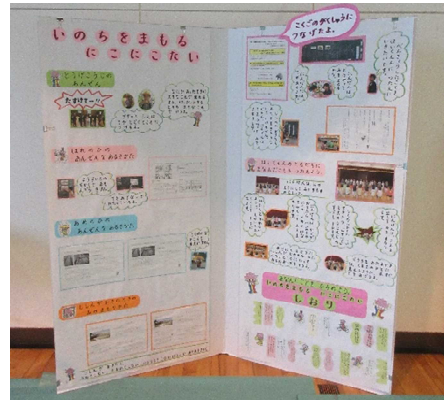
「いのちをまもるにこにこたい あんぜんにせいかつしよう」をテーマに、生活安全を中心に、災害安全・交通安全についての学習にも取り組んだ。

1学期は、自分の命を守るためにどのような行動をとらなければいけないのか、まずは「知る」ことから学習を進めてきた。朝の会や帰りの会、生活科や学級活動の時間等において、校内外の安全な過ごし方について考えさせた。参観日には、地震からどうやって身を守るのか、通学路にある危険な物について話し合い、親子で防災について考える機会

を設定した。また、1学期に学んだことの発信として、地震や火事、車、不審者からの「身の守り方」について保育園で発表をした。

2学期は、知識として得たことを実践できるよう、繰り返し校内外での安全な過ごし方について考えたり確認したりして、習慣化させるようにした。また、安全に過ごすためのめあてを立てて実践し、自分の行動を振り返ったり、危険に気づき、安全な行動について考えたりさせて、より自分ごととして捉えることのできる授業作りに取り組んだ。

3学期は、蓮池保育園の年長児に安全・安心を伝えられるよう、命を守るためにできるようになったことをまとめ、発信していく。



<2年生>

「いのちをまもる はすいけわくわくたんけんたい」をテーマに、生活科や学級活動の学習を関連させ、生活安全を中心に取り組んだ。

1学期は、安全に過ごすために、「きまりを守らないとどんなことが起きるのか」「なぜ危ないのか」を考えてきた。学習したことを実際に1年生に伝えることで、自分ごととして捉えられるよい機会となった。

2学期は、「自分たちの住んでいる地域を知ること」、「地域とつながること」が安全教育の第一歩と考え、町探検に出かける機会を設定した。事前に子どもの疑問や知りたいことを調査し、町探検の際に地域の方へインタビューをする中で、さらに地域への親しみや愛着を深めさせた。

また、「蓮池パトロール隊」の方々やお世話になっている地域の方と関わる機会を多くとる中で、地域のためにできることを考え、自ら進んで地域の方と関わりを持つとする子どもの姿を目指し、実践を行った。



<3年生>

総合的な学習の時間や特別活動、社会科の学習を関連させて、「自分の命を自分で守ろう～3年生命を守り隊～」をテーマに、災害安全（その他の災害）や交通安全についての学習に取り組んだ。

1学期は、社会科の校区探検で見つけた校区の危険箇所を保護者や地域の方々に伝えたいという子どもたちの意見から学習をスタートした。その中で、交通ルールについて調べたり、「地震や水害が発生してしまった時どのような被害が起きるの



か」、「どのような対応を取っていけばよいか」などについて考えたりしてきた。

2学期は、1学期に得た知識を生かして、自分たちが考えたゴールを目指して取り組んだ。防災1dayキャンプでの体験や、消防署・警察署の見学を通して、得た知識を確認したり実践したりすることで、自分事として捉えられるようにした。

今年度は、①「自分ごととして捉え、自分ができることを実践していく」、②「知識として得た事を身近な人に伝えることができるようにする」の2つの視点を設定し、研究を進めた。

<4年生>

総合的な学習の時間や学級活動、社会科の学習を関連させて、4A「みんなでセーフティーサバイバー!」、4B「目指せ!FDS!～未来の災害から生き残れる人へ～」をそれぞれの学級スローガンとし、災害安全(震災・気象災害)についての学習に取り組んだ。

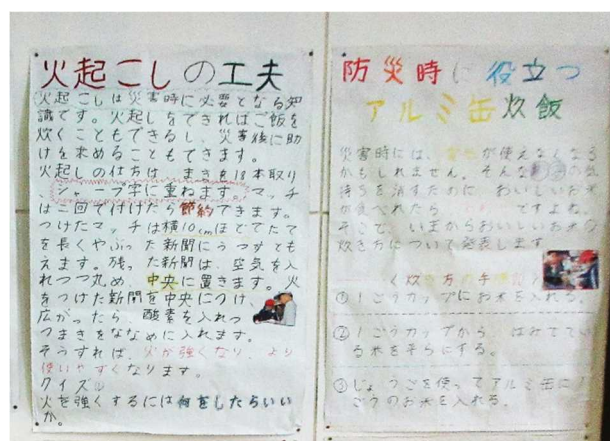
1学期は、高知県で多い自然災害について調べた。子どもたちが集めた情報から、台風や大雨による水災害と震災の被害が多いことが分かった。これからは高知県で生活していくことや、高知県には家族だけでなくたくさんの人々が生活していることから、「どうすれば被害を減らすことができるのか」という子どもたちの疑問から学習を出発した。昨年度は、南海トラフ地震について調べ、知識として得た情報を自分たちの行動に移すことを目標に学習しているため、今年度は、自分たちがこれまでに学習してきたことをもとに、高知県に住んでいる人々に安全について発信することを目標に取り組んだ。

2学期には、社会福祉協議会と協力して高齢者体験を行ったことで、支援の方法は1つではないことを理解し、相手に合わせた情報を発信できるようにした。



<5年生>

総合的な学習の時間を中心に様々な教科を関連させ、安全教育に取り組んだ。蓮池地区は、近くにある波介川と仁淀川に挟まれた地形であり、大雨が長時間降り続いた際には浸水被害も考えられる。治水工事は完成しているが、近年起こっている線状降水帯による被害は今後も考えられる。そのような地域の特性を考え、第5学年では総合的な学習で「気象災害」を中心に学習を進めてきた。



1学期は、まず、国語科の単元「知りたいことを聞き出そう」で、昨年度気象災害について取り組んだ6年生にインタビュー活動を行い、地域に起こる気象災害について理解を深めた。また、自分たちの地域の特性を学習していく中で、自宅避難についても考えた。宿泊研修で「アルミ缶炊飯」を行ったが、「災害時に自宅でこんなにおいしいものが食べられたらほっとする」という子どもの発言から、自宅避難をした際にも「ほっと安心できるものを発信していこう」と学習を進めた。

2学期以降は、「線状降水帯による『洪水・土砂災害』防災パンフレット」に載せる内容について調査・実践を行った。

<6年生>

安全教育のまとめとして、総合的な学習の時間において「みんなでつなぐ3つの安全 ～助け合って蓮池を守ろう～」をテーマに、3領域について学習を進めた。

1学期は、安全の知識を獲得するため、タブレット端末や本を活用して安全について調べたり、関係機関に協力していただいたりしながら授業を行った。

2学期は、1学期に得た知識を生かして自分たちが考えたゴールを目指し取り組んだ。その際、子どもが作り上げるものからにより良いものになるように、専門家や校内外の教職員にも助言をいただきながら、目標達成に向けて取り組んだ。

3学期は、完成したものを実際に発信していくようにする。全校の子どもに発信するだけでなく、地域の方々や近隣の保育園、中学校・高等学校にも発信していくようにし、掲げた目標を具現化できるようにする。



(3) 取組における成果と課題

【成果】

昨年度までは、「教科の中でいかに安全教育を日常的に位置付けていくか」を研究の柱として、知識の習得を中心に進めてきた。本年度は、さらに子どもたち自身に「自分ごと」として捉えさせるため、研究のテーマを「自分ごと」とし「自分の身に置き換え考え、判断し、行動できる」子どもの姿を目指し取組を推進した。子どもが身に付けるべき安全に関する資質・能力を具体的にイメージしながら、各教科等とのカリキュラム・マネジメントを図り、発達段階に応じた取組を継続してきた。安全安心な学校生活は当たり前前のものではなく、たゆまぬ安全教育・安全管理の継続があつて成り立つものであることを念頭に置き、次代の「安全文化」を創造する子どもの育成を目指して、「チーム蓮池」で研究を推進してきた。

子どもたちに「自分ごと」として捉えさせるための有効な手立てについては、研究授業を通して明らかにすることができた。そして、研究授業を続ける中で積み上げてきた「自分ごと」として捉えさせるための手立てを、日頃の授業づくりをする中で選択し、取り入れていくこともできた。

また、全校を対象に行った「安全アンケート」から明らかになった、子どもたちと教員との安全に対する認識のズレを意識した授業づくりを行うことができた。併せて、その授業を通して子どもたちの行動がどのように変容したかを検証する体制をとることができてきた。

【課題】

教科等横断的カリキュラム・マネジメントにより授業づくりを行ってきたが、各授業において、教科等と安全教育のどちらに比重を置くかに難しさが残った。安全教育の視点からは目標を達成できたと言える授業でも、教科等としての目標を達成しきれていない場合が少なくなかった。

子どもたちの行動の変容については、授業だけでは即効性はないため、長期的な目で見ていかなくてはならない。そのため、子どもたちの行動の何がどう変わったのか、PDCA サイクルを通して現状を確認し、子どもたちと一緒に考えていく必要があった。

4 事業の成果と課題

【成果】

- ・本事業を推進する中で、モデル校の取組を通して連携校の3校だけでなく、全ての市内小中学校へ安全教育の実践的な取組内容共有することができた。
- ・学校安全計画及び危険等発生時対処要領の策定が義務付けられており、法律上義務付けられた学校安全計画等の策定は、どの学校に通っていても児童生徒等が安心して学校生活を送ることができるようにするために必要最低限のものである。拠点校の計画や実践・取組内容を参考にし、土佐市内小中学校の安全教育担当教員を中心として、各学校において修正・改善に活かすことができた。
- ・地域や各専門機関等多くの講師を招聘し、児童の活動について専門的な立場から助言を受けたことで災害に対する認識を深め、児童が意欲的に活動に取り組むことができた。
- ・被災地視察では、拠点校、協力校の教員が参加し、改めて防災教育の重要を強く感じ、安全教育の重要性を学ぶ機会となった。
- ・拠点校の公開授業や研究発表会において、多くの外部有識者の講話を聴く機会があり、市内の安全教育担当教員の安全教育への意識向上につながった。

【課題】

- ・学校における安全教育は、児童生徒等が安全に関する資質・能力を教科等横断的な視点で確実に育むことができるよう、自助・共助・公助の視点を適切に取り入れながら、地域の特性や児童生徒等の実情に応じて、各教科等の安全に関する内容のつながりを整理し、教育課程を編成することが重要であり、今後の課題である。
- ・土佐市として情報の内容や発信時期、発信方法など工夫改善していく必要がある。土佐市内全体で安全教育に取り組んでいくための機会や、時間を確保していくことも今後の課題である。

5 今後の取組の見通し

安全教育の3領域について、年間計画を基に全校で取組を進める中で、子どもたちに安全に関する知識はある一定身についてきている。しかし、学習したことを行動に移すことができるためには、子ども自身が自分の生活を振り返り、改善していくことができるような指導のさらなる工夫が必要である。

安全教育の取組を進めるにあたっては、校内の組織体制整備を強化するとともに、校長のリーダーシップのもと、校内の組織体制の整備が必要不可欠である。学校安全の取組の実効性を高めるためには、コミュニティ・スクールや地域協働本部等の仕組みを活用し、地震などの自然災害、学校における活動中の事故や不審者侵入事件など、学校の努力だけでは防止できない事案に対して連携して取組を推進することができると思う。地域や関係機関等と連携して組織的に実効性のある持続可能な学校安全の取組の推進が今後は一層重要となる。

組織的・計画的に地域等と連携し、実践・改善を継続していきたい。